

< 講演 > 道草だった日本語と共に泣き笑いしながら 歩んできた道

著者	莫 邦富
図書名	グローバル社会における日本語のコミュニケーション：日本語を学ぶことはなぜ必要か：国立国語研究所第6回NINJALフォーラム
ページ	17-25
発行年	2013-06-28
シリーズ	NINJALフォーラムシリーズ；4
URL	http://doi.org/10.15084/00000918

道草だった日本語と共に泣き笑いしながら歩んできた道

作家・ジャーナリスト 莫邦富

今日は、国立国語研究所主催の講演会ですので、もともと日本語教師だった私は緊張を覚えています。さきほど迫田先生が、日本語を教える楽しさ、難しさという話を取り上げてくださいましたが、私にとっては、日本語を教えるというより、日本語を学ぶことが、私にとって、日本語を学ぶこと自体が難しいと痛感してきた数十年でした。そもそも日本語を学ぶ動機が不純だったためです。その不純な動機に最後までつきまわれてしまいました。今日のタイトルは、「道草だった日本語と共に泣き笑いしながら歩んできた道」という、とても国立国語研究所の講演会らしくないタイトルでお話をさせていただこうかと思えます。

日本との出会い

中国は今週から習近平さんの時代になりました。たまたま習近平さんと私は同じ年齢です。同じ年齢の習近平さんが中国のトップになったのを見て非常に感慨深いものがあります。

振り返って、私たちは文革世代です。私の日本語学習も文革経験と切り離して話すことができません。私は、一九七〇年五月、一七歳のとき農村にとばされました。私のとばされた先は、旧ソ連との国境の近くにある黒竜江省の農村です。中国語でいうと綏濱



モー・バンフ

中華人民共和国上海市生まれ。上海外国語大学日本語学科卒。同大学講師を経て、85年に来日。知日派ジャーナリストとして現代中国の問題、日中関係、労働諸問題に至るまで、幅広い分野で発言を続けている。

また、「新華僑」^{※1}や「蛇頭」^{※2}といった新語を日本に定着させたことでも知られる。中国向けネーミング開発、日中地方自治体や企業に対するコンサルタントとしても積極的に活動中。博報堂スーパーバイザ、SMBCコンサルティング顧問、山梨県観光懇話会委員等、安徽省観光大使。

主な著書は、『新華僑』（河出書房新社、1993年）、『蛇頭』（草思社、1994年）、『ノーと言える中国』（鈴木かおり 他と共訳、宋強・張蔵蔵 他 著、日本経済新聞社、1996年）、『それでもノーと言える中国』（鈴木かおり 他と共訳、宋強・張蔵蔵 他 著、日本経済新聞社、1997年）、『これは私が愛した日本なのか～新華僑三〇年の履歴書』（岩波書店、2002年）、『中国ビジネスはネーミングで決まる』（平凡社、2008年）、『中国全省を読む』事典』（新潮社、2009年）、『鯛と羊』（海竜社、2009年）ほか。

※1 1979年の経済改革・開放政策実施以降、中国本土より海外に出国した、永住傾向の強い中国人のこと。それ以前に海外に定住した華僑は「老華僑」とよばれる。

※2 密航者をあっせんするブローカーのこと。スネークヘッドとも呼ばれる。「長蛇の列」をなして海外へとむかう「人蛇」たちの先頭にたつ者、の意。

(スイピン)、佳木斯(チャームス)あたりで松花江、ウスリー江に囲まれる三江平野と呼ばれる一帯です。図1の写眞は、おそらく日本では初公開で、十六歳の自分を見て、これだけの年月がすぎさつていったものだ。

黒竜江省で何をしていたのかというと、荒野を開墾しながら食糧をつくと同時に、旧ソ連との国境で領土紛争が起こっていたので軍事衝突に備えるということで国境の土地に送り込まれたのです。その後、図2に示すようなきれいな田畑になりましたが、大変な苦勞をしました。

日本との出会いはこの黒竜江省です。黒竜江省でトラクターに乗って荒野を開墾していたある日、トラクターがものすごくリズムカルに振動していたのを感じて、おかしいなと思い、降りて鋤で掘り起こした土の断面を見ると、等間隔の波状にうっているのに気づきました。そこは堆積平野の荒野だったので、等間隔の波状を見て、機械で耕した跡ではないかと思ったのです。しかし、荒野と耕された跡という相反する現象が、自分には理解できませんでした。いろいろな人を訪問して尋ねて確認して、ようやくわかりました。そこは、昔、日本の開拓団がいたところだったのです。それが私の日本との最初の出会いです。

そこに日中国交正常化のニュースがとんできました。当時、野良仕事をしながらマスメディアの記者のような仕事もしていたので、理屈上は日中国交正常化が非常に大きなニュースであることはわかっていました。ですが、日常生活的には、まるで月の上で何か起こっているようなことで、俺とは全然関係ないというように認識していました。その後、まさか自分の人生が日本と結びつくとは、当時は想像もできませんでした。

んでした。

外国語の学習……未知の世界への憧れ

こういった苦勞をしたなかで、今写眞にすると開墾された大平野はとてもきれいですが、当時の苦勞は大変なものでした。最初のころは機械もなかったもので、全部、鎌で収穫していました。広大な土地だから、田畑のこちら側から朝から刈り入れを始めて向こうに着いたときには、日が暮れていました。そのため、帰りには腰をまっすぐにするのができなくなりました。ですから、夜宿舎に戻っても、腰を曲げたままの格好で食事をしました。そういうことでさせられていたのです。

そのなかで、自分は詩人になりたい、詩を書くかと思っていました。すでに詩などを発表していて、詩集もだしていました。その当時、やや早熟だったのか、私が思ったことは、詩を書けるのは若い世代、感受性が豊かな時代の特権で、やがて年をとって詩が書けなくなるのじゃないか。それではどうすればいいのかという考えでいたところ、やっぱり外国語を勉強しなければならないと思うようになりました。

外国語を勉強するように思ったことは、やっぱり黒竜江省に配置されたことと大きく関連していました。当時、旧ソ連との国境の一番近いところでは、冬、川が凍結して川幅がものすごく狭くなっていて、岸壁を力強くけると、その反動で向こうまで滑っていけそうな感じでした。もちろんそんなことはできません。文革中ですから、そんなことしたら、まず銃殺されてしまいます。国境の川のだ真ん中にまるで見えない壁がそびえたっていたような状況でした。しかし、人間は、



1970年5月から74年7月まで黒竜江に下放。松花江、黒竜江、ウスリー江に囲まれる一帯は三江平野と呼ばれるが、「北大荒」という異称で知られる。そこで多感な青春時代を5年近く送った。おかげで、いまでも時々、夢の中で松花江や黒竜江の波の音が聞こえてくる。

図1

「黒竜江省の夏は版画のような世界だ。色は単純で明るい。地の果てまで続く麦畑は収穫期が近づくと金色に輝き、空は透き通るように青い。木々の緑が目にしみる。点々と見える兵团宿舎の赤いレンガがこの版画の世界に人間の息吹を感じさせる。いつか妻や娘に見せてやりたい、私の青春時代の原風景だ」

－2006年5月20日付朝日新聞 mo@china より



図2

やってはいけないといわれると、よけいにやりたくなるわけです。壁の向こうを見てはいけないといわれても、かたの壁に遮られている向こうを見たいという気持ちが逆によけいに強くなりました。壁を越えて向こうにいくと、もう一つの世界があるのではないかと思つて、向こうの世界を知るためには外国語を勉強する必要もある、とも自然に思うようになりました。

当時、農村でこんなこともありました。反革命分子として、中国の外交部のロシア語の通訳だった人が、ロシア語ができるという理由だけでスパイとみなされ、労働改造のために送り込まれてきました。私が彼の監視役だったのです。

ある日、彼と一緒に羊を放牧しにきました。彼との会話のなかでいろいろと刺激を受けました(図3)。もっといろいろ勉強しなければいけない。文革はいつまでも続くはずはないだろうとつくよく思いました。一九七三年の年が明けてから私は上海に帰省しました。

日本語との出会い

詩を書いていたので本屋に詩集を買いにいったとき、本屋の入り口に、表紙がブルーの本が山と積まれているのを見てビックリしました。文革中にそんな色の表紙の本はほとんどありませんでした。何の本だろうと思つて手に取ったら、日本語のラジオ講座のテキストでした。そのテキストを開けてみると、五十音図があつて、ひらがなの「あいうえお」などはわけのわからない奇妙な符号にしか見えなかったのですが、その符号の下にローマ字表記で「a、i、u、e、o」と書かれているのを見ました。母音が五つしかないのを見て不思議に思いました。日本人も恋愛するでしょう。失恋することも

きつとあるだろうと。怒るとき、悲しむとき、自分の感情をいろいろ表現しなければならぬわけですが、五つの母音で表現しきれぬのだろうか。そこは詩人的な発想になつて、韻を踏むとき五つだと単調すぎるのではないかとよけいな心配までしました(図4)。

もともと外国語を勉強しようかと思つていたので思い出して、そうだと日本語を勉強すればいいのではないかとその時、ひらめきました。今まで敵国語だったので学習者があまりいませんでした。ライバルがあまりいないわけです。今勉強すれば希少価値もきつとでてくるだろうとも思いました。結局、その日は詩集を買わずに日本語のラジオ講座のテキストを買つて帰りました。

この本を見たとき、もう一つおもしろかったことがあります。平仮名とかわけのわからない表示があつて、それは読めないのですが、ローマ字がついたので、それなりに読めました。文革中の本ですから、革命的な言葉が一杯でてきます。「赤旗」という単語が例にてきて、漢字を見ると、中国では「紅旗」ですが、「[akahata]とローマ字で書いてあります。紅も赤いということですから、少し工夫すれば別に苦労もせず覚えられようと思ひました。また、ローマ字を見ると、「a、ka、sa、ta、na」と全部アが入っているし、簡単に読めます。こんな簡単な発音の言葉なら、そんなに苦労せずに日本語を覚えられようと思ひました(図5)。

それでラジオ講座を勉強し始めて、夕行のところまで勉強しかけたところで休暇が全部終わりました。黒竜江省へ帰らなければならぬので、上海中を探して一番高級なトランジスタラジオを買つて、ラジオ講座を勉強しようと思つて黒竜江省に帰りました。

上海外国語大学で日本語を専攻

やっぱり心配が的中していた。黒竜江省に着いてチェックしてみたら、上海の電波が心配していた通り受信できませんでした。受信できていたのは、旧ソ連とか韓国とか海外の電波です。文革中ですから海外のラジオを受信していると、反革命分子の現行犯として逮捕されます。それではまずいと思って、当時まだ電気がないため灯油を燃やした照明の下で勉強するのですが、灯油の煙で鼻が真っ黒になってしまつて、それではだめだと諦めました。むしろ朝早く起きて、だんだん露がでてくる季節になるので、蚊も飛べない。それで朝早く起きて勉強するように作戦を変えました。ナ行とかマ行を全部勉強して、「ヤユヨ」のところにいくと発音の自信がなくなりました。独学する

のは限界だと思い、大学にこうと決意しました。そのあとは運よく一九七四年に上海外国語大学にはいつて日本語を勉強することになったのです。

ただし、我が家では、お袋が、てっきり私は詩人になるだろうと思いい、作家になることを夢みていました。そうしたら、息子の私はわけのわからない外国語を勉強しはじめて、しかもよりにもよって、かつての敵国の日本語を勉強するなんて、親からみれば、私の人生は日本語に誘惑されたようなものです。お袋は最初から、猛烈に反対していました。でも、私は、それは関係ないじゃないか、戦争時代の問題はすでにすぎさっているし、日本は世界二位の経済大国です。しかも今勉強すれば希少価値もあるだろうと、いろいろ親と議論して、最終的には今のような道を歩むことを動揺しませんでした。

詩人を目指したが、国境の川・黒竜江→国境という壁→未知の世界への憧れ→外国語を学ぼうと目覚める。

「ふと、文化大革命の時代に下放され、黒竜江のほとりで経験したことを思い出した。外交部の通訳が、ロシア語ができるという理由だけでスパイとみなされ、労働改造のために送られてきた。私が彼の監視役だった。

ある日、2人で羊の放牧にでかけた。休憩時間に川辺で、ソ連はどんな国ですか、と質問した。私に悪意がないと理解した彼はロシア文学と美術を語った。川の向こうを見つめた目の奥に、何か光るものがあった。一方、私を見る目の余光には、ある種の哀れみがにじんでいた。それを読み取った私はかすかに狼狽した。将来、私も国境を超える知識の翼をつけたい。心の中でそう誓った。それが後に外国語を勉強する動機の一つになった」

－朝日新聞mo@china(07年10月20日)

図3

テキストを開けてみた。50音図がある。ひらがなの「あいうえお」などはわけのわからぬ奇妙な符号にしか見えない。だが、その符号の下にあるローマ字表記は読めると思った。a、i、u、e、o……すぐ読めたので、かえって不思議になった。

日本語はこれほど簡単でわずか5つしかない母音を使って構成された言語なのか。人間の豊かな感情を現わすのに必要なたくさんの言葉を、日本人はどうやって作り上げたのだろう。この母音の少ない日本語を使って愛という繊細かつ微妙で豊かな感情を若い女性は どうやって吐露するのだろう。詩人は詩を書く時どうやって韻を踏むのだろう……

図4

「テキストをめくりながら、想像はどんどん思わぬ方向へ飛んでいく。

文化大革命時代のテキストらしく、赤旗という単語が例に出ている。akahata、と、ローマ字表記を見ながら声を小さく出して読んでみた。その耳慣れない音の響きに、ある新鮮な喜びを感じた。未知のものへの想像に煽りたてられた興奮に快い陶酔感を覚えた。

夏の夜空にちりばめられた星座に、はじめて天文望遠鏡を向けて覗いた時の興奮と陶酔感に似た喜びである」

図5

辞書のなかった日本語学習

しかし、文革中に日本語を勉強することは非常に大変でした。私は卒業するまで日本語の辞書を持っていませんでした。買おうと思っても出版されていないのです。出版されている本は毛沢東選集といった政治関係の本ばかりでした。大事な日本語の辞書はありませんでした。ですから、大学時代は、夕食が終わったらいち早く閲覧室にいて、図書館にある十冊足らずの辞書を仲間と争いながら確保しなければなりませんでした。

また、文革中、日本語専攻の学生なのに日本で出版された本でも指定されたもの以外は読むではいけないということでした。そこで密かに、うちの大学に教えにこられた日本人の先生に文庫本を借りました。しかし、全寮制ですから昼間は本を読む時間はありません。夜、消灯後、トイレにいきました。トイレの豆電球ですから照度が足りない、そこで少しでも豆電球に近づこうと、洗面所のテーブルをトイレにひっぱってきて、机の上に椅子を乗せて、それによじ登って読みました。最初に読んだ小説が、横溝正史の『悪魔が来たりて笛を吹く』でした。読んだあとつくづく感じたことは、あのような小説は深夜のトイレのなかで読むべきでなかったと思いました。その本を開けると、最初に読むのをやめたほうがいいとすすめるといった内容が書かれています。「怖い話ですよ、夜読むのはやめなさい」というような内容です。しかし、逆説的に言うと、あの環境の中で読むと、そのスリル性が数倍も数十倍も増えてきます。

もう一つ怖かったことがあります(図6)。こういう外国の本を読んでいるところを誰かに目撃されて、学校の幹部に知らされたら、た

深夜のトイレの中で読んだ日本の小説。「文革時代、日本語専攻の私たちは指定されたもの以外、日本で出版された小説や新聞などの刊行物を読んではいけないことになっていた。

私が最初に日本の小説を読んだ場所は、深夜の男子寮のトイレの中だった。暗い照明に少しでも近づこうとして、机の上にイスを載せてそこによじ登り、トイレの臭気に我慢しながら、無我夢中で読んだ。

それは日本人の先生からひそかに借りた横溝正史の『悪魔が来たりて笛を吹く』の文庫本だった。トイレを利用する同級生に怪しまれないよう、日本語教科書の中に小説を挟んで読んだ。

しかし、ばれた時の危険さから来る緊張のせいか、廊下から足音が聞こえるたびに、悪魔が本当に現れたかのような錯覚に襲われ、びくびくした」

—朝日新聞mo@china
(08年5月10日)より



図6 『悪魔が来たりて笛を吹く』横溝正史(角川文庫)

ぶん私の政治人生はそこで一発で終わります。幸いなことに、文庫本ですからサイズが小さい。当時の私たちの日本語の教科書は、自分でガリ版でつくったものですから非常に大きく、日本というA3を畳んだような感じのものです。その中に文庫本を入れて、外から見ると、私はよじ登って日本語の教科書を一生懸命読んでいるように見える。他のクラスの学生たちもみんな深夜トイレを利用するから、みんな感心しているのです。「莫さん、すごいですね。こんなに勉強しているんですか」と。

『悪魔が来たりて笛を吹く』を読み終えて、この本を同じ寮のもう一人に貸すわけです。六人だったんで、一週間、交代で、当番のように本を勉強しました。そのおかげで、うちの寮の評判がものすごくよ

日本語との、道草のような偶然とも言える出会いに、詩人になろうという私の人生設計は完全に乱され、日本語、そして日本と泣き笑いをともにする人生の道を歩み始めた。この行動が後になって自分の人生をどれほど変えてしまうのか、その時は予想だにしていなかった。

もうひとつの誤算は、詩を訳せなかったことだ。島崎藤村の『若菜集』が好きで、翻訳しようと思っていたが、どうしてもあの情熱的かつリズムカルな情調を醸し出せず、苦しんでいた。松尾芭蕉の俳句「古池や 蛙（かわず）飛び込む 水の音」も五・七・五の音節ではなかなかうまく訳せない。



図7 『若菜集』島崎藤村（日本図書センター）

大学を卒業するまで日本語辞書を持てなかった。それを知った山崎豊子さんは、のちに訪中する時、「新明解国語辞典」を持ってきてくださった。辞書のない苦しみをいやというほど体験したから、のちに辞書、用例集作りへの情熱につながった。

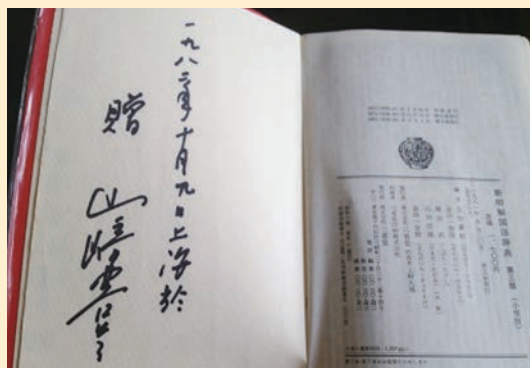


図8 『沈まぬ太陽〈1〉アフリカ篇（上）』山崎豊子（新潮文庫）

かった。あの寮の人たちはものすごく勉強している、徹夜で教科書を読んでいるともっぱらの噂でした。それで読み終わった本を先生に返して、また新しい本を借りてきました。松本清張の『点と線』、『黒い画集』とか。そういうなかで勉強してきました。

日本語学習の誤算

日本語を勉強する、もう一つの大きな動機がありました。詩を書けるのは若いころの特権で、やがては書けなくなるだろうと思いますが、詩を書くテクニクは年齢とともに円熟してくるわけです。そうすると、外国語を勉強すれば、詩を翻訳できるのではないかと最初に思っていました。

実際に日本語を勉強して、私が非常に好きな詩集は島崎藤村の『若菜集』です。卒業してから、いよいよ自分の目的を達成するために翻訳しようと思って、半年間、『若菜集』の自分の好きだったいくつかの詩を何度も何度も訳してみました。どうしても、できたものが気に入らません。最終的には、自分の気力を思い知らされてあきらめてしまいました（図7）。今まで日本の詩を本格的に訳したことはありません。そういう意味では日本語を勉強した動機が不純だったため、本当の目標は達成できませんでした。

一方、大学を卒業するまで辞書のない環境のなかで日本語を勉強したことは、逆に、辞書のない外国語学習の

苦しさ、難しさをいやというほど知ったので、辞書作りにもものすごく積極的になりました。私があまり辞書を持っていなかったことを知った日本の友人たちが、いろいろな辞書を送ってくれました(図8)。たとえば、山崎豊子さんなどが。そういうかたちでいろいろ交流させていただいています。

大学を卒業した後、やはり世界文学大辞典とか日本に来てから中国語のインターネット用語集、企業ブランド名辞典などいろいろ本をつくったりしました(図9)。そもそもの動機は、辞書のなかった経験からきたものです。

日本語を学習することだけが難しかったわけではありません。当時、日本語を学ぶことを通して得た情報などを発信することも難しかった。せっかく改革・開放時代になって、いろいろ日本の研究などができるようになったとしても、外国文学の動きを報道するのも、当時、中国では内部刊行物にかぎっていたため公に発表することができませんでした。しかし、こうした環境の中でもめげずに自分なりにいろいろとやってきました。たとえば、『君の名は』を翻訳しました。最初雑誌に掲載されたもので、ものすごく売れました。数回も増刷して七十五万部くらい増刷したそうですが、出版社が五十万部で上に報告するのをやめました。こんなにたくさん刷られていることが共産党の宣伝部に知られると、私たちに不都合があるということで、五十万部しか刷っていないといいながら、すでに七十五万部刷っていました。ただし、残念なことに、あのときは中国はまだ印税制ではなく、原稿料制でした。一冊しか刷らなくても百万冊刷っても私の

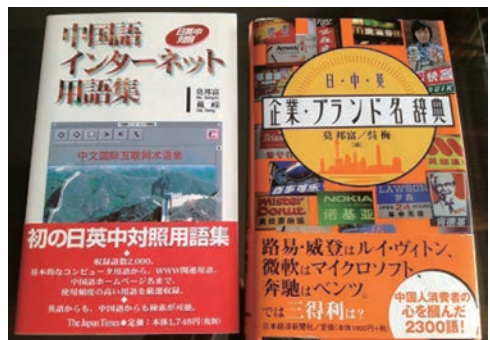


図9 左:『中国語インターネット用語集 一日英中対照』(ジャパントイムズ)、
右:『日・中・英 企業・ブランド名辞典』
(日本経済新聞社)

収入は同じでした。

その後、日本に来て、このような本(図10)を書いていきます。語学関係のものは、図11、12に示しています。

日本語を学ぶこと ハードからソフトへ

最後に私がいいたいことは、今日ここで、私の日本語を勉強するいきさつを教えることはありません。苦しい、厳しい環境のなかで、いかに自分が努力して日本語を勉強してきたかをいうのではありません。なぜ、ここまで苦勞をいとわずに日本語を勉強したのかというと、あのころの日本は輝いていたからです。日本語学習を通して日本のいろいろなことを知れたからです。学びたかったです。一九七八年から始まった中国の改革開放時代は、じつは隠されたスローガンがあったわけです。それはなんなのかというと、日本に学ば



図10 『中国人から見た不思議な日本語』
左: 河出書房新社1998年版、
右: 日経ビジネス人文庫2002年版

日本は周りを海に囲まれた海洋国家、中国は狩猟民族の打ち立てた牧畜国家。日本語の魚や魚卵の名前の豊富さが独特である一方、中国語の牛、馬、羊などの家畜の部位の多さは、日本人の想像以上です。

本書は、中国語を母国語とする著者が、日本人も知らない日本語を駆使して、言語の奥行き、広さの面白さを縦横無尽に語った一冊です。



図11 『鯛と羊—日本と中国、食から見る文化の醍醐味』
(海竜社)



図12 左：『21世紀の大国 中国を読む「新語」』
(NHK出版)、右：朝日新聞出の連載コラムをまとめた
『日中「アジア・トップ」への条件』(朝日新書)

うということでした。当時の学ぶ対象は、ある意味では、ハード的なものでした。ハードという視点から日本を学ぶというわけです。これは、宝山製鉄所や中国版新幹線に象徴されたものでした。その二つの象徴的なプロジェクトでハードの面から日本に学ぶ時代はそろそろ一段落します。これからは、ソフトの時代です。二〇〇四年ころから中国で講演するとき強調しているのですが、私たち中国人はもう一度、日本に学ぶというスローガンを大きく叫ぶべきだと私は主張しています。ただ今度はハード的なものよりも、ソフト的なものを念頭に置いています。日本の進んだところ、たとえば、環境汚染に対するいろいろの退治措置とか環境を保護する方法、社会システム、たと

えば年金制度などのソフトなところを学ぶべきだと思います。

一方、日本の皆さんも、新しい課題を突きつけられていると思います。中国人から見れば、日本のハード的なところを学ぶときは、かたがかりました。うちの家内が日本に八一年にはじめて訪問して、日本のカラーテレビを持ち帰りました。うちの団地では最初のカラーテレビでした。それをみんな見て、日本はすごいといっているわけです。かたがかりがあるものです。しかし、ソフトの時代になると、かたがかりがないんです。この魅力を、日本人のことを多少知っている外国人の私たちも一生懸命アピールする必要があるのですが、日本の皆さんも、もつと上手に日本の持っているソフト的な面をアピールしないといけないと思います。その意味では、本日のこの講演は、ソフトの

面から日本の魅力をどうアピールするかというテーマが、隠し味的になっているのではないかと思います。所詮私は道草をくうかたちで日本語を勉強したものですから、本日この壇上で話す内容も道草的なものでした。ご清聴ありがとうございました。